

芸術祭優秀作品賞

毎日映画コンクール  
教育文化映画賞

日本産業映画賞

文部省選定

— 連帯の手わざ —

# 芭蕉布を 織る女たち

## ■解説

この映画は、沖縄で最初に国の重要無形文化財の指定をうけた芭蕉布を織る女たちを描いた記録映画です。

沖縄には、一時期たくさんあった織物の中でも、芭蕉布は最もその風土にふさわしく、上下を問わず夏の衣料として愛用されたものですが、近代の衣生活の変化に追われ、最後には沖縄戦で姿を消してしまいました。

その芭蕉布が、もとの主産地の一つであった沖縄本島北部の大宜味村喜如嘉おほぎみずんきじよで、不死鳥のように蘇えるには、心あたたまる美しい物語が秘められています。映画はその芭蕉布復興の歴史を紹介しながら、芭蕉布を織る女たちの連帯の手わざを描いていきます。

16ミリ カラー/30分  
¥180,000

企画 (財)ポーラ伝統  
文化振興財団

製作

株式  
会社

桜映画社

東京都新宿区西新宿1-22-1  
スタンダードビル TEL. 03(342)5768

配給



口割り



よりかけ



拵括り



染色



織り

## ■すいせんの言葉

染織評論家 山辺知行

この映画は、沖縄本島の大宜味村、喜如嘉で戦後見事に復興された芭蕉布が、どんな人たちによって、いかに守られ支えられて、昔ながらの手作りの技術の純度を失うことなく今日に持ち続けられているかを物語るものである。

元米、多くの人の手を経て完成される染織品というものは、素材とその各々の工程、分野における技術のバランスがよくとれていなければ、けっしていいものはできない。もしその中の一つが質的に低下したら、他がいかによくても全体はその低さにまで墮ち込んでしまうからである。この映画はこのような手仕事の連帯によって生み出される作品の美しさとともに、伝統的な染織というものの昔ありし姿を三十分という短かい映写時間の間に実によく伝えてくれる。

平良敏子さんという地味だがすぐれた女性を指導者に、芭蕉の栽培から、糸づくり、拵括り、染色、織り、仕上げなど、それぞれの工程を分担している女たち。重要無形文化財、喜如嘉の芭蕉布は、これらの人びとの手わざの緊密な連帯作業の結果にほかならない。

平良さんは、他の人たちの技術を下に踏まえておのれ一人を染織作家として表に出したりすることはしない。工房で織った物も、村でお婆さんたちが織った物も、ひとしく「喜如嘉の芭蕉布」なのである。老若を問わず各工程を受け持つ人びとの力一ぱい労力を惜しまぬ働きぶり、そこにはお金や名誉欲に縛られた暗さや陰湿さはみじんもない。

しかしそのかげには、今日のはげしい機械化、量産化、商業主義のもとで、こうした全くの手わざによる作品を単なる趣味や遊びではなく、りっぱな商品として成り立たせていくための、並々ならぬ苦心も努力もある。

この純度の高い芭蕉布の製作態度を、今後も長く持ち続けていくためにいかにすべきか、いかにあるべきかという点については、単にこの芭蕉布に限らず昔ながらの形を残す無形文化財を、いかにもち伝えていくべきかという問題に対して、突き刺さるような鋭い示唆を投げかけて、見るものを肅然とさせずにはおかない。

## ■ものがたり

芭蕉布の復興をささえた平良敏子さんの工房では、若い女性たちから、沖縄の戦後を生きぬいた、お婆さんたちまでが、芭蕉布を紡ぎ、染め、織り上げる作業を続けている。

芭蕉布は、原料になる糸芭蕉の栽培から、それから美しい糸を引き出す工程、柄を考えそれを様々な工程をへて織り上げるまで、一貫して女性の仕事とされている。

昔は若い頃には織り、年をとると糸芭蕉を栽培し、老婆になると糸をつなぐというふうには、年令的な分業が行われたが、今も工房では、若い女性たちにはまず織る喜びを教え、それから少しずつ地味な糸づくりを習わせる。

また工房だけではなく、村には自分の芭蕉畑を持ち、機も持って好きな柄を織っている女たちがおり、糸を紡ぐお婆さんたちも一体になって、見事な合作として、芭蕉布が織り上げられていく。その芭蕉布には、作者の名もない。芭蕉布は、連帯の手わざが生み出す連帯作品なのである。

## ■製作スタッフ

脚本/演出	村山英治
撮影	金山富男
解説	加藤治子
製作	六鹿英雄 村山和雄
作曲	山内 忠
監修	岡田 譲